

〔本朝食鑑十〕狸〇中

附錄 貉狐狸類、源順曰、貉音鴿、漢語抄云、無之奈、似狐、而善睡者也、必大按、(中略)山人曰、狸之斑色有、熟睡、見人則、駭走而竄矣、

〔枕草子二〕にくきもの

にはかにわづらふ人のあるに、げんざもとむるに、れいある所にはあらで、〇中かぢせさするに、

此ごろもの、けにごうじにけるにや、あるまゝに、すなはちねぶり。ごゑ。になりたるいとくし、

〔宇治拾遺物語十一〕卅あまりばかりなる僧の、ほそやかなる目をも、人に見あはせず、ねぶりめに

て時々あみだ佛を申、

〔秦山集甲乙錄三〕重遠〇曰、土佐諸社之祭、十歲至十二三歲童女二人、潔齋七日、祭日朝白粉明衣飾

之、神主附耳誦祓文、騎馬前行、名曰行事殿、蓋神之形代也、神輿游行之間、或一日、或半日、行事殿睡眠

不覺、左右捧持、僅得居鞍、祭日、人游人雜、還絡繹、鐘鼓歌舞、喧囂踴躍、而睡眠不知、祭畢歸社、神主復

附耳誦祓文、然後居然醒覺、是爲常例、萬有一不睡、則必有事故、因去其濁穢、神主再三祓除、遣之、往々

復常、

○按ズルニ、睡眠病ノ事ハ、方技部疾病篇雜病條ニ載セタリ、

〔運歩色葉集滿〕寢

〔書言字考節用集九〕目睡太平

〔遊仙窟〕少時坐睡、則夢見十娘、

〔倭訓栞前編二十九〕まどろむ 遊仙窟に睡をよむ、少睡をいへり、目蕩ける義なるべし、

〔源氏物語三十五〕たゞいさ、かまどろむとしもなき夢に、このてならし、ねこのいとらうたげ

にうちなきてきたるを、〇下